

幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発 — 3 —

松尾 砂織 洲濱美由紀 岡 芳香 加藤 秀雄
杉川 千草 朝倉 匡夫 居川あゆ子 桑田 一也
深澤 清治 松浦 伸和

I はじめに

本研究は、幼小中一貫教育力を基盤とした国際交流学習のためのカリキュラム開発をめざす具体的な取り組みとして、教材・単元開発を目的とした研究の第3年次である。そして、この学習開発のために国際交流開発部会を設置し、次のような研究テーマのもとに研究開発を進めてきた。

研究テーマ

グローバル社会に生きる日本人としての基礎的な国際的コミュニケーション能力の育成を図る幼小中の発達段階に応じた学習の開発

ここでねらいとするのは、園児・児童・生徒を取り巻く社会のグローバル化が著しいこの21世紀において、世界の中の日本に生まれた私たちが幼小中段階でどのような国際的コミュニケーション能力を身につけるべきかを考えることである。

1年次(2003)の研究¹⁾においては、単元開発において最も大切なことはいかに幼小中の発達段階に適合した活動を作り、実施するかということであるという前提に立ち、幼小中の各レベルにおいての取り組みを考え、理論の構築と実践的な活動を行った。

2年次(2004)の研究²⁾は、初年度の研究で明らかになった2点を中心的な課題に据えて取り組んだ。1点目は、幼稚園、小学校、中学校に位置づけられた国際交流学習の定着である。そのためには、校種の枠を越えた単元構成と継続的かつ系統的な単元開発が必要となった。2点目は、子どもたちの実態を把握し、どのような力がついたか、どのような変容が見られたかを明らかにする評価方法の開発である。

3年次(2005)である本研究は、過去2年間取り組んできた国際交流学習³⁾のさらなる定着と、単元レベルで

の評価方法の設定、試行を課題として取り組んだ。今年度の国際交流学習は、幼稚園、小学校、中学校とも、広島大学の留学生を主とした直接的な体験活動を仕組むことで、コミュニケーションスキルの向上をねらいとした学習単元の開発を中心的な研究課題に据えた。2005年度の実態調査によると、外国の方と交流することに対しては、積極的な様子を見せる子どもがいる一方で、自分の思いを書いたり、話したりすることに苦手意識を持っていることが明らかになった。そこで、直接的な体験活動を仕組むことで、外国人との交流に必要な態度を身につけさせるとともに、体験の中で感じた思いや考えを表現しようとする意識を高めさせる活動を定期的に、かつ継続的に計画することができれば、コミュニケーションスキルを向上させることができるのではないかと考えた。そして、活動を仕組むにあたっては、国際交流学習の中でつけた4つの力の育成をはかる評価方法についても試行、実施することにした。

II 育成したい力とめざす子どもの姿

国際交流学習開発部会では、国際交流学習を通して育成したい力とめざす子どもの姿(子ども像)を次のように設定している。図-1にその概念図を示す。

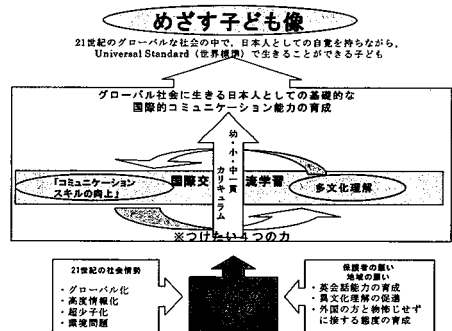


図-1 育成したい力とめざす子どもの姿

Saori Matsuo, Miyuki Suhama, Yoshika Oka, Hideo Kato, Chigusa Sugikawa, Masao Asakura, Ayuko Igawa, Kazuya Kuwata, Seiji Fukazawa, Nobukazu Matsuura: Developing materials and instructions for International Exchange Study from kindergarten through elementary and junior high school (3)

ここで挙げた「つけたい4つの力」とは次の内容をさす。

- ①多文化を受け入れ、理解し、それを尊重しようとする態度や能力【多文化理解】
- ②異なる文化や考え方を持った人たちとの共生を求める態度や能力【交流・共生】
- ③日本人という個人の立場で自己を理解し、自国での言葉で自己を表現する能力【自己表現力】
- ④国際社会で、相手の立場を尊重しながら自分の意見を明確に表現するための外国語を使ったコミュニケーション能力【コミュニケーション能力】

以下、留学生との直接的な体験活動を通して、つけたい4つの力の育成をはかった実践例を報告する。

Ⅲ-①中学校の実践事例の概要

本単元は交流学习の中に平和学習の要素を取り入れ、その両方を単元の目標として設定した。中学校3年生はこれまでも数々の交流学习を行ってきたが、卒業を控え、国際コミュニケーション学習の仕上げの単元としても位置づけている。

○ 単元名 「エスコートプロジェクト in Hiroshima」

○ 単元について

本単元「エスコートプロジェクト in Hiroshima」は、平和学習を軸とした留学生との交流の実践例である。生徒たちは、広島に関する平和学習を行い、それをもとに、『広島平和公園ガイドブック』を作った。次に実際に広島大学の留学生に、平和公園内の慰霊碑や原爆ドームなどを、英語で案内するガイド実習(11月2日)を行った。この日は2時間半という短い時間だったが、終始笑顔の絶えない、大変楽しい交流であった。

なお、学習のまとめとして、今回の経験を生かし、次の3年生に引き継ぐという視点から単元の学習内容の修正を行っている。

○ 単元の目標

・広島平和公園周辺の施設および慰霊碑を留学生にガイドすることで、戦争・平和について考え、積極的にかかわろうとする態度と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。【自己表現力、交流・共生、コミュニケーション能力】

・平和を語る原点だといわれている被爆の事実を知り、戦争の人間破壊の恐ろしさを理解し、私たち自身、平和のために何をすべきなのかを考えさせる。【自己表現力】

【学習の実際】

学習の流れは次のようになる。

- ① なぜ学ぶのか・学習課題と目標の設定(1時間)
- ② 何を学ぶのか・学習の流れの確認と役割分担(1時間)
- ③ どう学ぶのか・調べ学習とガイドブック作り(4時間)
- ④ 平和公園ガイド実習・(1日)
- ⑤ どう学んだのか・単元の修正(1時間)

「なぜ学ぶのか」では、単元の概要と、目標を説明した後、課題1として、「ガイド実習で留学生さんに何を伝えたいのか」をクラス全体で考えた。なぜならば、今までの反省から、最初に生徒に学習の意義と価値を理解させておかないとその後の学習に興味がなかなか持てないという傾向があることがはっきりしてきたからである。生徒たちは、戦争、特に原爆についてまだまだ自分たちは知らないことが多いから、まずは、自分自身が戦争についてよく知り、平和への思いを伝えようと決定した。

伝えたいことが決まった後に、「何を学ぶのか」では、インターネット資料と、図書資料を用い、各自が平和に関する調べ学習を行った。同時に、英語教材『SADAKO』を読むことで、「原爆の子の像」にまつわるエピソードを学習するとともに、英語表現をガイドブック作りに役立てるようにした。

「どう学ぶのか」で、調べたことを元にガイドブック作りを行った。導入から、ガイドブック完成までの時間が6時間しかなくここまでの学習は大変忙しいものとなった。結局当初計画していたガイド練習は授業の中では時間を取ることが出来ず、秋休みの宿題になった。



単元の実施に当たり、事前と事後に次のようなアンケートを行っている。

【成果と課題】

学習を進めて行くにあたっては、目的(目標)・内容・評価を明確にすることが必要で、これらが不明瞭であると、生徒は学習に対する意欲が低下する。また、学習を効果的に進めるためには、課題設定から、情報収集、情報再構成、再発信までの学習の道筋を身に付け、

主体的・創造的に学習する力の育成、即ち、「学び方を学ぶ単元」を効果的に配列することも必要となってくる。これらがよりよく循環することで、生徒たちの学びもより向上することが期待される。表-1は、単元の評価基準表を示している。

表-1 単元の評価基準表

評価規準	平和公園のガイドプランを作成することを通して、戦争・平和について考え、積極的にかかわろうとする態度と、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をもっている。		
評価基準	A	B	C
【自己表現力】 【交流・共生】 【コミュニケーション能力】	・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに、ガイド実習で、留学生と積極的にコミュニケーションを図ることができた。	・ガイドプラン作成に積極的に参加するとともに、ガイド実習で、留学生と積極的にコミュニケーションを図ろうとした。	・ガイドプラン作成に参加する。ガイド実習で、留学生とコミュニケーションをとろうとする意欲が乏しい。

Ⅲ-②小学校の実践事例の概要

4年生の年度当初の調査によると、子どもたちは、「外国のことをいろいろ知りたい」「外国の人とお話をしたい」など国際交流学习に大変意欲的であるが、「自分の考えを話したり書いたりする」「外国の人に手紙を送る」など自分の思いを表現することについては消極的な傾向が見られた。そこで、本年度は、外国の方と直接ふれあう体験など、子どもたちが楽しみながら、自然な状況の中で自分の思いを積極的に表現することができるようにしていきたいと考えた。また、多文化理解の学習として積み上げていくために、年間を通して7名の留学生に来ていただくようにした。

【単元について】

- 学年：広島大学附属三原小学校4年生 37名
- 単元名：「留学生さんとなかよくなるう」
- 実施期間：平成17年7月～平成18年2月

本単元は、留学生との交流を通して、いろいろな国の文化に関心を持ち、それらの国々に対する理解を深めたり受け入れたりしようとする気持ちを持たせる学習である。子どもたちは、これまでに年に1回程度外国の方の学校訪問を受けてきているが、その機会を国際交流学习の中にきちんと位置づけることができていなかった。そこで、本年度は、年間を通して同じメンバーの留学生と交流し、子どもたちに多文化理解やコミュニケーション能力を育てていこうと考えている。留学生との交流という外国の方と直接ふれ合う体験によって、子どもたちが楽しみながら学習に意欲的に取り組むことを期待している。

○ 子どもの実態

子どもたちは、学級集団の中で、自分の思いを素直に表現でき、英語を用いる活動にも積極的に取り組もうとする意欲を持っている。7月と9月に行った留学生との交流を「楽しかった」と答えた子どもは、37名中35名で、その理由として「いろいろな国のことを教えてもらった」「楽しく遊べた」などをあげている(平成17年9月2日調べ)。一方で、「あまり楽しくなかった」と答えた2名の子どもは「言葉があまり通じない」「うまく遊べなかった」などをあげていた。

○ 学習にあたって

留学生との出会いが楽しいものになるように、子どもたちの思いを生かした交流会が子どもたちの力で運営できるようにする。留学生には、民族衣装など出身国の文化をあらわすものを持ってきていただくようにあらかじめお願いし、母国の文化を紹介していただくとともに、ゲームなどで直接ふれあう活動を通して、子どもたちの異文化に対する抵抗感をなくすようにする。留学生の国の文化について調べる学習の一環として、異文化を直接体験する学習を位置づける。また、国語科の「くらしを見つめて」の単元と関連させることによって、目的意識を持った国際交流学习をさせ、多文化理解を深めさせていきたい。留学生にも子どもたちの学習意図を把握してもらえるように、事前の打ち合わせや連絡を密にとり、年間を通じて学習を積み上げていくことができるようにする。

○ 単元の目標

・留学生の国の文化や自分の国の文化との違いを調べることを通して、それぞれの文化を大切にしようとする気持ちを持つことができるようにする。【多文化理

た研究を行ってきた。3年目を終えて、今回の目標であった国際交流学習の具体的な取り組みの定着、そしてより具体的な評価の視点・方法についてまとめてみたい。

第1に、国際交流学習のプログラム化がある程度、確立されたと言えるであろう。

1) 留学生との交流：広島大学の留学生の参加によって、遊びや説明などを通して交流を図るというパターンは定着してきた。また、どの学年の児童・生徒も人種、言葉、肌の色に当初は戸惑い、時にはおびえていた子どもたちも、次第に心の垣根が取れていくのを実感することができた。

2) バイ・カルチュラルからマルチ・カルチャルへ：外国語の中で明らかに主要な言語である英語を母語とする人々との交流が中心になることが多いが、本プロジェクトで国際交流学習に参加したのは英語圏以外の留学生がほとんどであり、英米一辺倒から多国籍文化への耐性が育成されている。

3) 学年別活動形態：次のような学年別活動形態が確立された。

幼稚園：活動のお膳立ては教師主導であることが多いが、遊びを通して、あるいは英語を通して笑顔で一緒に活動することにより、しかも日常的な活動により外国の人々を身近に感じる気持ちを育む活動が中心となる。その際、保育者の態度によって決まる部分も多い。

小学校：「外国のことをいろいろと知りたい」など理解を中心とする活動から、外国の人々と直接ふれあう体験などを通して自然な状況の中で自分の気持ちを積極的に表現することをめざした活動へと移行する。

中学校：エスコート学習、ガイド練習をしながら、相手のことを積極的に理解すること、さらにそれにとど

まらず、自らの学校や文化について積極的に伝えていくとする活動へと発展する。

第2に、評価については単元レベルでその緒についたばかりである。今回はたとえば中学校では平和学習と連動させたため、「戦争・平和について考える」など単元固有の評価観点および基準の設定に終わった。しかしながら、これは重要な一歩であると考えている。めざす子ども像に望まれる4つの力、すなわち多文化理解、共生・交流、自己表現力、コミュニケーション能力の4つについてそれぞれ必要最低限、他律的、自律的・積極的の少なくとも3段階において、それぞれの単元学習においてつきたい力の到達レベルを設定していくことで、今後、考案されるさまざまな活動を集積して、国際交流学習のための活動バンクづくりを図っていきたいと考える。

参考文献

- 1) 深澤清治，松尾砂織，岡野佳子，松島英恵，江本繁子，岡芳香，奥井京子，中山貴司，林原慎，居川あゆ子，桑田一也(2003)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅰ)」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第32号，pp. 23-31.
- 2) 深澤清治，松浦伸和，松尾砂織，洲濱美由紀，岡芳香，加藤秀雄，杉川千草，朝倉匡夫，居川あゆ子，桑田一也(2004)「幼小中一貫における国際交流学習の教材・単元開発(Ⅱ)」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第33号，pp. 139-147.
- 3) 広島大学附属三原学園編著(2005)「21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発」，pp. 26-69.